

幼い日の思い出

私が住む相模湖町寸沢嵐の道志集落は、かつて津久井郡内郷村道志という地名でした。道志川の上流に向かって南西部の高台に位置しています。私が幼い頃、学校に通うのにも砂利道の為、石車に乗りよく転びました。私の家から学校までは約2.7km、村の端からでは全長約4kmの道のりを歩かなければなりませんでした。

雨の日はまだしも、雪が降った冬の朝は大変です。子供達の通学路に50～60cmも積もったのでは通行止めになる為、地元住民が総出で雪掃き作業です。その当時は降る量も多く、大変な作業でした。またいつの時代でも同じですが、雪が降って喜ぶのは子供と犬だけ。ようやく全線が開通し、いよいよ通学が始まり、小学生は横に両手を伸ばし、脇の下くらいまでも降り積もった道を地元の住民が通学路にする為に雪を両側にはねあげた上にわざわざ登り、雪投げしたり転げ回りながら、ようやく学校に辿り着きます。それでも風邪をひいて青洩(あおばな)を出していても洋服の袖が鼻紙代わりで、鼻水を袖にこすり付けます。それでも子供は風の子、「三太物語」の三太と同様、我々も元気でした。

寒い冬が過ぎ、ようやく春が来て、月日の立つのも早く道志川の水も少しずつ温もりが感じられるようになると、川魚の活動も活発になります。やがて川の近くを通ると蛙の鳴き声が日増しに大きくなり、耳に心地よく、疲れをいやしてくれます。月日の流れは速く、春の温もりを感じさせてくれたお日様は真夏の日差しに早変わり。毎年ながら我々が清流、道志川の鮎の解禁日も日増しに近くなります。

当時の道志川の川幅は今よりずっと広く、また水量も多く、もっと川に変化がありました。岩肌も荒々しく突き出している所も多く、その為、不気味なほど深い淵がありました。道志川の代表的な淵はトメさん淵、ユキさん淵で、我々が子供のころにも地区内の若者が犠牲になっています。上流で雨が少しでも多目に降れば、下流は物凄い濁流と化し、淵も大きな音を立てているだけでも恐ろしい。渦巻きも大きくなり子供たちは無鉄砲にこの渦巻状の中へ飛び込むので大変危険の為、危ないので大人たちはあそこにはカッパがいて足を引っ張り込むので近寄らないでと日頃から注意を促す。それだけでなくトメさんやユキさんがこの淵で犠牲になっているので、その餓鬼道が元気に泳ぐ若者を羨み取りつくだと先人は語る。それもあつたが、危ないので近寄らせないために、カッパやその淵で亡くなった方を利用してシグナルに変えたのではないのでしょうか。そのように当時はダムも無

い時代の為、水量も多かったので魚も川鱒(かわます)、鰻(かじか)、ウグイなど種類が多く、大きな魚がいっぱいいました。鮎も川の中を素足で歩くと足裏にもぐり込んで来るほど沢山いました。川の近くに行くと、スイカのような甘い匂いが凄かったです。

そして、いよいよ多くの釣り人が待ち焦がれていた鮎の解禁日(毎年6月1日～10月14日)。毎日遠方から太公望がやって来ます。その中には有名人も多くいました。大会社の社長や教育者、芸能人、大学病院の先生、中には歯科医の大先生方もいました。

こんな話もあります。ある日、常連客の歯医者先生の先生がやって来た釣り宿のご主人が、歯が痛くて大騒ぎしている時のこと。無理を承知で「歯が痛くて大変だ」と先生に話をすると、「日頃釣り宿でお世話になっているので」と、早速治療に必要な道具を取りに行き、一晩で治したといえます。当時釣り宿だった家族の方は、「日頃、人に親切にしておけば、悪いことばかりではなく、必ず良い人にもめぐり会える」と笑顔で話して下さいました。

鮎の解禁となると、地元の子供も大人も夕方になると竿をかついで川を目指します。私も子供の頃、学校からの帰り道、勉強の話などはどこへやら、釣り好きの友達2人と「帰ったら釣りに行こう」と話し合い、家に着くなりカバンを放り投げて一目散に台所へ駆け込みました。おやつを一口ほおぼって元気を回復すると、右手にかねて準備してあった釣竿、左手におやつ残りをつかんで家を飛び出しました。

手作りの竹竿にはあらかじめテグスに毛鉤(カバリ)用の鉤7～8本を付け、上下2カ所に茅の茎を短く切ったウキを付けてありました。川に着いたときにすぐに釣れるようにと竹竿を立て、テグスの先を竹竿の先に結わいて5～6回グルグルと巻きつけました。ビク(釣った魚の入れ物)が無いので、竹ざるに紐を付けてビク代わりにしました。それを首からぶら下げて3人で険しい山道を急いで駆け降り、やっと道志川の釣り場に近い田んぼの水路までたどり着きます。

ほかの2人もいつも川へ来るので、親から「川へ行ったら必ずうちの田んぼに水が入っているか見て来い」と言われていました。水路上に懸かっている丸太橋を渡り、そこで3人は自分の家の田んぼを見に行くため、別々になりました。

ある日、その後で考えもつかない恐ろしい事に出会おうとは思ってもせず、私が自分の家の田んぼに向かうためあぜ道に一步を踏み出し、その足を着こうとしたとき、足の下に物体にびっくり。正体はへびの大群。ヤマカガシが20から30匹もウジャウジャいます。足を着く場所がないほどいたので足を下ろせなくなり、手には釣竿やビクを持っていたので、思い切り田んぼの中に飛び込むように倒れ込み、夢中で高い土手の上に這い上がりま

した。へびに気付いたのは一瞬の事で、動転した気持ちはなかなか治まりませんでした。繁殖時のへびが一カ所に集まり丸くなって絡み合う様子を、そのときまでに一度だけ見たことはありましたが、あぜ道一面によろよろと地面を這うほど多くの集団を見だのは初めてのことでした。

やっとのこと、二人が持つ釣り場へ到着。私がそんな事で遅くなったのとは別の事情で、2人共釣りもしないで、がっくりとうなだれていました。話を聞いてみると、「これだよ」と釣竿を前に差し出しました。よく見ると、釣竿に付いているはずの毛鉤もテグスも付いていません。多分、早く釣りをしたいばかりに毛鉤やテグスのことも忘れて、釣竿を肩に担いで雑木林の細道を一目散に駆け降りて来たので、「木の枝にでも引っ掛けちゃったんだろう」と思いました。そのくせ、自分の釣竿をよく見ると、釣竿の下半分の毛鉤がありませんでした。それに気付いて3人で顔を見合わせて、しょげるばかりでした。

そのとき、私が余りに遅かったのと服が汚れているので、友達の一人が「何かあったの」と訊ねました。「ああ、そうだよ、へびの大群に出会って大変だったよ」と答えました。その話で盛り上がり、釣りもしないうちに太陽も沈み、辺りが薄暗くなって来たので、3人でビク代わりの竹ざるを頭にかぶり、お互いに顔を見合わせてその滑稽な姿に大笑いしながら「きょうは釣りはできなかったけど、へびにも襲(おそ)われず、ケガもしなくてよかった、よかった」と喜び合いながら家路につきました。